

感謝の気持ち

太田市立尾島中学校 三年 松本 朗奈

「おかえり。」これは、私が母に、毎日言っている言葉。「ただいまー。」これは母が、私に笑顔で返してくれる言葉。

私の母は、何事にも全力投球だ。特に私のことになると、なおさらである。私が困っているそぶりを見せると、うるさいくらい相談にのってこようとす。また、「お腹が痛い」などと、ちよつとでも言うのと、何度も「大丈夫？」としつこく聞いてくるので「心配しすぎなんだよ。」と、嫌に思うこともある。

でも、そんな母に対する考え方が変わった出来事があった。去年、私はインフルエンザにかかってしまった。母は、私の熱が下がるまで、会社を休み、ずっと私を看病してくれた。私は、母が「大丈夫？気分悪くない？」と言う度に、小学生の頃のことを思い出した。私は当時、重い喘息を患っていた。今では薬を全く飲まなくても平気な体になったが、喘息が治るまでは、母は本当に必死だった。私をスイミングスクールに毎

日のように通わせ、小学校のマーチングバンドを続ける事も強くすすめた。私は、体力的に不安があったが、「大丈夫、一緒に続けていこう。」という母の言葉とともに、習い事を続けた結果、小学校を卒業する頃には、バタフライが泳げるようになって、トロンボーンが吹けるようになった。そして、発作も徐々に起こらなくなっていった。そのことを思い出した私は、「昔も今も母が、こんなに心配性で口うるさいのは、私の健康と幸せを常に考えていてくれるからなのだ。」ということに気がついた。

だから、私は母に、「もう中学生なんだから大丈夫だよ。お母さんにうつつちゃうから、もういいよ。」と言った。すると母は笑って、「ありがとう。大丈夫だよ。」と言ってくれた。そして、その言葉に続けて、「こう言った。「お母さんはね、パパと約束してるんだあ。」母は、父との約束についてはじめて私に話してくれた。

私と母は、大事な人をがんとという病気で失っている。母にとって夫であり、私にとって父である。父は、十三歳の若さでこの世を去ってしまった。私が生まれて十ヶ月後のことである。父は、自分の亡くなる直前に「俺がもし死んだら、あきなのことを頼むよ。」と、母に残したそうだ。母は、父の思いを大切に引き継ぎ、

父の分も私に愛情をそそぎ、全力で、娘を守ることを約束した。

「私は、母から二人分の愛情をもらっているんだ。」胸に熱いものがこみ上げてきた。私はその時、母の私への愛情の大きさを改めて知ることができた。

母が、もし父の死を乗り越えられず、前を向いて歩き出せなかったら、今の私はないのだと思う。母が、父との約束を守り、二人分の愛情で私を育ててくれたからこそ、私は今、幸せな毎日を過ごしているのだ。

私が悲しいときは励ましてくれ、うれしいときはともに笑いあってくれる母に、感謝せずにはいられない。

私にとって母親から口うるさく言われるということ、両親から愛されている、という証である。いつも全力投球で接してくれる母は、身をもってそのことを、私に教えてくれたのだ。

今日もまた、母は遅い時間に帰ってくるだろう。私は、感謝の気持ちをこめて、笑顔で言おう。

「おかえり。」

そして、

「ありがとう。」

